

『世界の遺産』地域の自然と人 —ネパール、クンプと白神山地の暮らし—

今井 一郎
弘前大学人文学部

クンプ地域に居住するシェルパたちは、伝統的に外部経済・社会の変化に即応しながら自らの生活形態も変化させてきたが、1970年代からはヒマラヤ・トレッキングに関わる生活形態が主流を占めるようになった。近年はトレッキングに関わる諸活動に従事する度合いが強まり、クンプに移入して以来培ってきた農耕・牧畜・交易といった活動は衰微する傾向にある。生活の都市化も進んでいる。また、多くのトレッカーが入域することによって地域全体の環境破壊と汚染が顕在化してきた。本稿では、クンプと類似した歴史の変遷をたどってきた白神山地周辺村落で行なった調査で得られた資料をクンプの状況に重ね合わせ、山村生活が今後都市社会と関わりつつ地域に根ざした生活をおくる方法を探る手掛かりにしたい。

1 はじめに

1992年11月15日の午後に、私たちはドゥドゥ・コシ左岸の斜面に展開するボルツェ (Phortse) 村のロッジにたどり着いた (図1、2)。3年ほど前に始めたロッジだという。私たちに同行したガイド、ポーターへの支払を済ませて記念撮影をしている時に私はアーリヤ人のような顔立ちをした男達を客室の中に見かけた。その時はネパール政府の役人だろうと思っていたが、ガイドたちと別れてからその中の1人と話すうちに私は驚いてしまった。彼らはボンベイから来た重機器製造会社の社員であることがわかったのだ。昨晩はゴーキョに泊まり明日はパンボチュェに向かう予定だ、と聞かされたのである。隣国からの旅行者に何故そんなに驚く必要があったのか、私は後から恥ずかしく思った。またその数日後、朝もやに霞むロッジ前の広場で2人のネパール人トレッカーが私に話しかけてきた時にも、いささかの驚きを禁じ得なかった。彼らはポカラ近郊に住んでいるマガールだったのだ。彼らは「今回が初めてのトレッキングだが、親類、友人達が雇兵や他のビジネスのために海外で働いており、トレッキングすることにも抵抗は感じない」と言いながら、アタックザックを担ぐとパンボチュェに向かって行った。これま

での私のネパール経験から、トレッキング中に出会うネパール人といえば地域住民の他に政府関係者、ガイドかポーターと決まっていた。インド人のトレッカーにも会ったことはなかったが、ネパール人トレッカーの存在を知ったことは予想外だった。

私は、1982年の10月初旬にもわずか一週間だがこの地域を訪れたことがある。ナムチェからドゥドゥ・コシ右岸沿いにゴーキョまで歩いたのである。当時のドゥドゥ・コシ流域にはトレッカーの姿がまばらで、「ゴーキョ」というカルカは大変に景色が良い所だ、ということがようやくトレッカーたちの間に広まりつつあった頃だった。トレッカー向けの宿泊施設もルート上には十分に整備されておらず、ここへのトレッキングに(高地の放牧小屋)はテントの携行が不可欠であった。湖のほとりには「ティーショップ」と称する小さなカルカが2軒ほど建っているだけだった。私はその1軒に泊めてもらったが、カルカの中には仕切りがなく、壁ぎわの細長い長椅子の上にかろうじて体を伸ばして夜を明かした。そのカルカで「これからはここにも沢山のトレッカーが来るようになるから店の看板を書いてちょうだい」と主婦に頼まれ、「ゴーキョで2番目の茶店」と言うので木

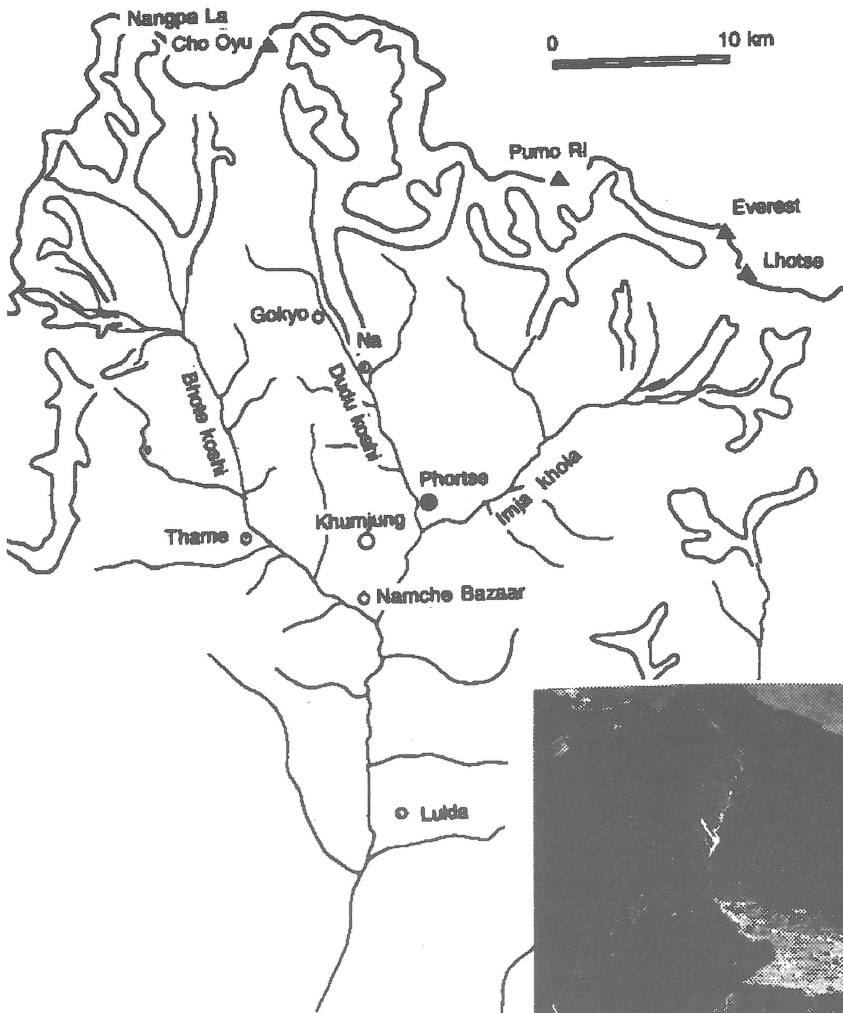


図1 Khumbu 地域の概念図

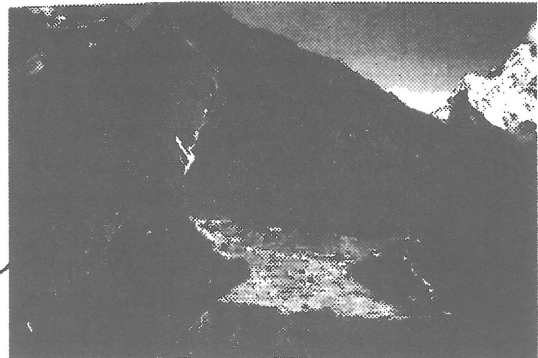


図2 a ドウドウ・コシ対岸から見たポルツェ



図2 b ポルツェ村から上流をのぞむ

の板に「TEA SHOP No.2」とマジックで大書したことを思い出す。私は今回ゴーキョまで行かなかったが、話によれば現在は大きなロッジが2軒建っており、シーズン中はトレッカーで賑わうそうだ。雪が降ると足止めを食らうトレッカーがで大混雑になる、という。私はその時ドウドウ・コシの左岸を歩くトレッカーが減多にいない、という話を聞いてゴーキョからの帰りには是非対岸に見えたポルツェ村に立ち寄りたかったのだが、体調が悪くて断念せざるを得なかった。その体験もあったので、今回はポルツェ村での集中的な滞在を望んでいたのである。ネパール行き直前に読んだ文献（Fisher, 1990, Brower, 1991）からも、ポルツェ村はトレッキングのメインルートからはずれた静かなたたずまいを見せる周辺村落である、と理解していた。

しかし、今回クンブを再訪してみると、ドウド

ウ・コシの左岸上に付けられた道は、エベレスト・ベースキャンプ、カラ・パタル方面とゴークョをつなぐルートとして、思いのほかトレッカーたちに利用されていたのである。この流域の集落やカルカにはトレッカー向けのロッジが建ち、店に置いてある商品も種類が豊富であった。ミネラル・ウォーターやビールはほとんどの売店で手に入れることができた。私は、短期間(11月11日～12月7日)ではあったが10年ぶりに訪れたクンプ地方において、冒頭で述べたようなインド人やネパール人トレッカーに出合ったことも合わせて、改めてこの地域におけるトレッキングの浸透ぶりを思い知らされたのである。同時に、私はこの旅行中目の当たりにしたクンプの現実と、近年調査した日本の白神山地域の状況が頭の中で妙に重なり合うことに軽い苛立ちをおぼえていた。

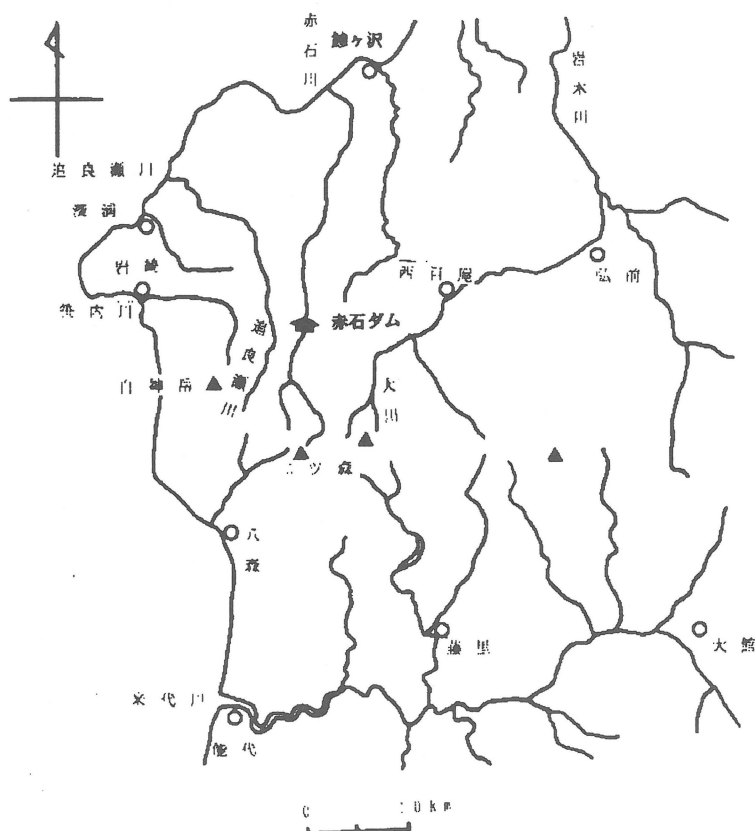


図3 白神山地周辺の市町村

2 白神山地周辺村落の調査から

なぜクンプと白神山地が重なり合うのか説明する前に、私が数年前に白神山地周辺の村落で行なった現地調査で得た知見を踏まえながら白神山地域が抱える諸問題の概要を述べておきたい。

青森県と秋田県の県境域に位置する白神山地は、標高1,000メートル級の山々が連なる山塊である（図3）。総面積は4万5,000ヘクタールにおよび、ブナを主体とする原生林に覆われる中心域は1万4,000ヘクタールの広がりをもつ。林野庁は、1990年3月この地域の国有林を「森林生態系保護地域」に指定し、原則として人手を加えない「保存地区」、教育・保養のための利用を認める「保全利用地区」などを定めた。環境庁は、自然保全審議会に対し白神山地の中心部約1万4,000ヘクタールを「自然環境保全地域」に指定するよう諮問し、1992年の5月に了承された。これは、日本国内最大の森林保全地域である。この指定については、「長年伐採の危機にさらされてきた原生林に、法による保護の網がかぶせられた」と評価する声があると同時に、指定地域外にもクマゲラなど貴重な動植物が生息しているために、より広範な地域指定を求める意見もある。その一方で、地元の林業者たちは伐採が禁止されることによって受ける経済的な打撃を懸念している。

これら一連の動きは、いわゆる「青秋林道問題」に端を発している、といってもよい。それは、1981年に秋田県八森町から青森、秋田両県を経て白神山地を横断する林道、いわゆる「青秋林道」の開発計画が決定されたことに始まる。林道建設の当初の目的としては 1：森林経営の活性化 2：経済圏の拡大 3：過疎の解消 4：文化の交流 などが掲げられていたが、この計画の発表によって自然保護と開発の問題が顕在化した。地元をはじめ全国的な自然保護運動が巻き起こり、林道は1982年に着工されたものの1990年には両県とも計画の白紙撤回を余儀なくされたのである。林道建設が中止されるに至ったプロセスの中でとりわけ人びとの注目を集めたのは、青森県が出した林道予定域の保安林指定解除の告示に対し、地元赤石川流域の住民多数が異議意見書に署名して建設反対の立場を明確に打ち出したことであった。それまでの例では、地元住民は開発促進の立場に立つ

が自然保護団体などが中心となって反対運動を繰り広げることが多かったのである。私は、研究室の教官や学生らとともに赤石川流域の村落で住民から聞き取りを行なうことによって、日本の高度経済成長期以後の変化を、それ以前の住民生活と対比させながら明確化し、その変化の意義を問う形で調査を進めていった。その結果、この地域の住民生活の特徴は以下のように要約できる（今井、1990）。

まず、赤石川流域の人びとは日常的な生活物資を最大限地域内で調達して暮らしを営んできた。すなわち、水田稲作と薪炭生産を基軸にした小規模な経済活動だったのである。ここには、鉱山、ダムのような地域経済の要となり外部社会と強い関わりを持つ産業、施設が存在しなかった。地理的にも、交通の要衝とはいえない。

その反面、人びとは山、川ときわめて密接に結び付いた暮らしを営んできた。その上流に白神山地という広大な森林が存在したことによって赤石川は優れた水質と水量に恵まれ、流域の人びとが川を様々な形で利用することを可能にした。それは、飲料水、灌漑用水、魚類の捕獲や流れを利用した伐木流送であった。人びとは、この地で生活する上で数々の工夫を生み出し、自然環境を最大限に利用することで独自の生活スタイルを築き上げていった。その中から山と川の変化を敏感に感じ取る目を養ってきたのである。

1950年代の後半に入ると、外部からの大きな波が相次いで押し寄せてきた。第2次世界大戦後の復興に引き続いて全国的に進行した高度経済成長時代の波と、その一環でもあった赤石ダムの建設であった。高度経済成長の波はこの地域に燃料革命とモータリゼーションの発達を促し、それまで伝統的に行なわれてきた薪炭生産活動は急速に衰退していった。人びとは農林業のほか新たに都市への出稼ぎという道を模索し続けた。やがて1970年代前期に、国は稲作減反政策に転じ、水田単作農業だけでは暮らしの前途がおぼつかなくなった。さらに、木材貿易の自由化が進むと林業にも生活を頼ることが出来ない状態が生じた。

1956年に行なわれた赤石ダムの建設は、白神山地西部の水を利用した電源開発事業として計画されたが、この事業は住民にほとんど利益をもたら

すことはなかった。そのことに気づいた住民はダム建設に反対して訴訟に踏み切ったのである。しかし、20年間にわたる補償交渉と裁判を通じて結局開発側の論理に押し切れられ、行政への不信感だけが住民の心に残された。

高度経済成長期が一段落すると、出稼ぎの形態は大きく変化していく。農業による収入よりも出稼ぎ収入の方が多くなり、多くの人びとは季節に関わりなく夫婦そろって長期間関東地方方面の都市で働くようになった。「通年出稼ぎ」が主流になったのである。

その時に青秋林道建設問題が起こった。多くの住民は、赤石ダム建設問題から尾を引く行政への不信感と自然資源との共存を計ろうとする生活者の視点を原動力として反対の立場を貫いたのである。林道建設のためにブナ林を大量に伐採することが水を汚して漁業被害やその他の災害を招くという懸念は、自然環境に対して大規模に人為的な改変を加えることに対する切実な危機感でもあった。

3 クンブ地域の村落

1) 研究の目的

白神山地の原生ブナ林地域は、国連ユネスコに、「世界の遺産」として屋久島などとともに推薦されることが決まり、現在その作業が進められている、という（朝日新聞、1992）。「世界の遺産」とは、1972年にユネスコで採択された「世界遺産条約」に基づいて、ユネスコ加盟国が人類共通の財産として登録した世界的に貴重な自然、文化遺産である。私がネパール、クンブ地域すなわち「Mt. Everest National Park」が、すでに1979年「世界の遺産」に指定されていることを知ったのは、今回カトマンズの書店で手にいれたナショナル・パークのガイドブック（Jefferies, 1991）を読んだからであった。私は、ここでようやく両地域が「世界の遺産」という共通項でくくれることに気付いたのである。両地域の住民の中には「世界の遺産」に指定されることを名誉なことだと感じている人がいるかもしれないが、その前に我々は「世界の遺産」として自然を保護することが住民生活に何をもたらすのか、ということを実際に即して考えなければならないのではないだろうか。

京都大学ヒマラヤ研究会は、医学学術研究計画の一環として人文・社会学系の研究者からなる調査隊を、1989年以来数次にわたりネパール・ヒマラヤのソル、クンブ地域に派遣してきた。これまでは、村落経済の変容過程、生業形態、住民の環境認識など、チベット、ブータン・ヒマラヤ地域との比較も含めた調査研究が行われてきた（河合 1990、1991、1992、古川 1990、1991、1992、月原 1990、1992など）。

私がクンブ入りする前に考えていたのは、この地域を白神山地の調査と同じ切口で分析することができないだろうか、という視点である。両地域とも国内では周辺部に位置し、近年まで経済的な可能性を中央から与えられていなかった。それ故に維持されてきた世界各地の自然環境や住民の生活文化に対して一定の価値が付与されるようになったのは最近の現象といえよう。先住民の文化、森林や湿原地帯の価値が見直されている世界的な潮流と軌を一にしている。クンブ地域は1976年にネパール政府によって国立公園化され、今から10年以上も前に「世界の遺産」に指定されたわけだから、これらの動きの中では白神山地域よりも早くから世界的に注目を集めてきた、といえよう。私は、両地域の住民生活を視野に入れながら山村住民の自然利用や環境認識、あるいは基層文化を探っていけるのではないかと考えたのである。以下の段落では、今回訪れたボルツェ村などドゥ・ドゥ・コシ流域での見聞を中心に記し、今後より集約的な調査研究を手がけるための足がかりとしたい。

2) 暮らしの変遷

ヒラリーとテンジンによるエベレスト登頂以後、日本や欧米などの登山隊との接触が始まる前から、シェルパ社会は農耕、牧畜といった自給性の強い生業活動だけでなく、チベットとインド方面を繋ぐ中継ぎ交易を活発に行なうことによって、外部経済に依存した生活を営んできた（Furer-haimendorf, 1965、1975など）。私は今回のボルツェ滞在中に、過去数十年間の住民の農耕・牧畜活動の詳細についてははっきりとは確かめられなかった。しかし、クンブ地域における各村落の生業形態には大きな変異が見られない、と思われ

る。すなわち、ボルツェ周辺では夏季にジャガイモ、ソバなどを栽培し、4月以降上流域に設置してあるいくつかのカルカにヤク、ナクなどの家畜を上げて周辺で放牧する。気温が上昇するにともなって標高4,000メートル以上の地域まで放牧地の高度を上げていくが、人びとはカルカの周囲でも耕作を行なう。交易活動も含めて考えれば、シェルパの人びとは移動性が高く家族が日常的に分散した居住形態を示すのである。また、私がボルツェ村で滞在していたロッジの主人A氏（60歳）によれば、15歳の時に初めてナンパ・ラ峠を越えてチベットに行って以来何度も峠越えをしてゾッキョ、ゾーモなどの雑種家畜をチベットに運び塩と引き換えてきた、という。チベットからの塩を低地の商人に売って現金収入を得るためである。多くのシェルパは敬虔なチベット仏教徒であることが知られているが、彼は約40年前にチベット、インドへの聖地巡礼の旅に出た経験をもっている。彼は近隣の村に住む2名の友人と連れだって、まずナンパ・ラを越えてラサ、カリンポンを巡り、ダーズリンを経てカルカッタまで3か月かけて巡礼旅行を続けたそうだ。その当時のシェルパ社会では、仏跡巡礼の旅をすることはさほど珍しいことではなかった、という。村落周辺での日常的な活動とチベット及び低地での交易活動の他に、巡礼旅行のような活動が頻繁に行なわれたことも、シェルパの文化を考察するうえで無視できないと思われる。

エベレストが登頂されて以後、シェルパ社会はヒマラヤ登山を媒介に外部社会との結びつきを強める方向に動き出す。さらに1970年代に入る頃からは、ネパールを訪れる外国人の関心が登山からヒマラヤ・トレッキングに移行していくのである。トレッキング産業にガイド、コックやポーターとして雇用されることがシェルパにとって新しい生計の道としてクローズアップされることになった。1959年のチベット動乱によって公式にはネパール・中国の国境が閉鎖されていたことも、シェルパの人びとをそれまでの行動パターンから引き離す力になった。1976年の国立公園化以来、クンプ地域が外部から多数の観光客（トレッカー）を受け入れることによって住民生活に大きな変化が生じたことは、すでに多くの論者が指摘して

いる（Furer-Haimendorf 1984, Fisher 前掲、Jefferies 前掲、河合1992など）。ボルツェ村はクンプでも保守的な集落とされてきたが（Fisher）、実際に訪れてみるとここでも多くの世帯が何らかの形でトレッキング産業に生計を依存していることがわかった。ボルツェ村の青年M氏によれば、村の男性の多くは少年時代からポーターとしてトレッキングの経験を積み重ねていく。やがてカトマンズなどの都市に本拠を置くトレッキング代理店などの専属のガイドやコックとなって働いて財産を蓄え、引退後はロッジ経営者としての道を歩むのが一つの理想的なコースとされているそうだ。彼の兄弟は彼を含めて4人いるが、現在は全員がカトマンズのトレッキング会社に籍を置く、という。かつて各村には人びとに強い影響力を持つラマ僧や寺院が存在し、住民の教育にもある種の役割を果たしていたというが、近年はルクラやシャンボチェから飛行機が利用できるようになり、首都カトマンズへのアプローチが容易になった。住民の間では欧米文化や都市生活への関心が高まり、多くの人が高等教育を受けるために都市生活を希望している。かつてボルツェ村のラマ僧が村の子供たちに経文を読ませていたこともあったというが、現在は高齢になったラマ僧が村の比較的豊かな家を回って読経しているだけである。

その結果、若年男性人口がトレッキング産業に従事するため村外に流出し、従来は男性が担っていた農耕、牧畜などに必要な重労働が、老人や女性にしわ寄せされる傾向が見られる。村落での生活に必要な労働を家族でまかないきれなくなり同時に生活の都市化が進むと、人びとは村落を離れていくようになる。このような現象は、日本の農山村において戦後の高度経済成長期以来顕著に進んだ過疎化現象と質的には同じものとしてとらえることができる。私がボルツェ村で滞在していたロッジの息子夫婦の家族も、トレッカーが少ない冬季間はロッジの営業を止めてカトマンズにいる親戚の家で過ごす、と語っていた。この家の息子はトレッキング会社に勤めており、平素から単身でカトマンズに暮らすか登山、トレッキングパーティーのメンバーとしてネパール各地で働いている。妻子が暮らすボルツェ村にはごくたまに短期間戻ってくるだけである。これは、白神山地域

村落の通年出稼ぎ者たちが盆と正月、または農繁期だけ短期間帰省することにきわめて類似している。ボルツェ村には約50軒の世帯があるが、私の滞在中はその三分の一程度の世帯が家族全員で村を離れていた。正確な理由は確かめられなかったが、その多くは一時的にせよ村外の現金収入源を求めて家族ぐるみで村を出ているのであろう。トレッキング産業がもたらす経済が住民生活に浸透することにより、今後とも現金収入の格差が世帯間で広がるだろうし、さらにそれが村落間の格差につながることも予想される。

また、私にはもう1つ気になる現象があった。ヒマラヤ登山全盛期以来培われてきた伝統により、トレッキングのガイドやコックとしては、シェルパ族が最適任だと思われてきた。事実、登山隊やトレッキングの世話をする者達を統括するサードクラスの人びとは現在でもシェルパ族で占められている。しかし、私たちがクンプ各地で出会ったガイド、コックたちに出身地を尋ねてみると、ポカラ周辺、ランタン谷のようにソル・クンプ以外の地域である場合が予想外に多かったのである。ネパール東部の出身者もガイドとしてクンプ地域を歩いているのだ。私には、これまでシェルパという民族が独占してきた職種が、トレッキング産業の発達によってシェルパ以外のネパール人たちに侵食されつつあるように感じられたのである。今後トレッキング・ガイドの出身民族が多様化していけば、現在シェルパが選択している生活戦略も何らかの対応を迫られるかもしれない。

3) 環境問題

前節では、クンプ地域に外国人トレッカーが大量に流れ込むことにより住民の生活が変容を強いられている現実に注目してみた。次に、ネパール・ヒマラヤの他の地域と同様にこの地域でも環境問題が顕在化していることに触れておかねばなるまい。この問題については、古川(1992)が、海外からの援助プロジェクトが住民生活に与えたインパクトの強さを取り上げて援助のあり方への再考をうながしている。私は本節において、実際にドウドウ・コシ流域を歩いて得た若干の感想を述べてみたい。

私には、ドウドウ・コシ河岸沿いの各所で見ら

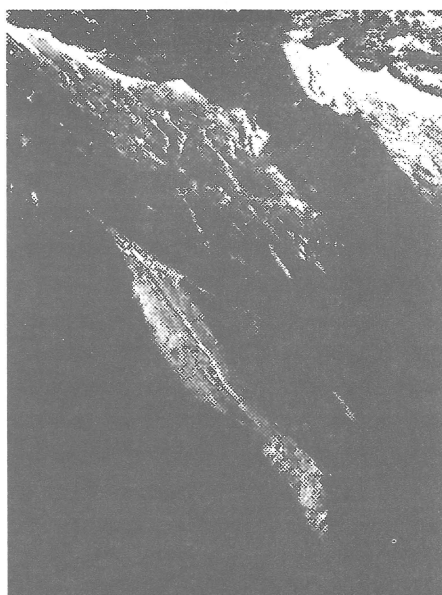


図4 ドウドウ・コシ右岸の崩壊地形

れた崩壊地形が強く印象に残っている(図4)。山腹を巻く道の路肩が崩れ、川床まで100メートル近くも急峻な崖が切り立っている光景があちこちに展開し、支沢から本流に大量の土砂が押し出して山腹のルートを塞いでいるような地点も多く見られたのだ。

私が1982年にランタン谷をトレッキングした時にも、ダウンチェ手前のトゥリスリ川左岸で同じような光景を目にした記憶がある。崩壊した地点に来ると、トレッカーや住民達は足場の悪い危険な巻き道を通らねばならなかったのである。その時の直接の原因は道の上部でバス道路を建設中であつたことだが、今回私がクンプで目撃した崩壊地形が生じた原因が、斜面一帯の貧弱な植生にあることは明らかであろう。Jefferies (1986) が指摘するとおり、クンプ地域の森林破壊は住民やトレッカーの燃料問題とともに、この地域の将来にとって大きな課題となつてかぶさっている。

ルート付近の地形が崩壊することは、人びとの通行にとって障害となるだけでなく、落石、転落などの大きな危険を伴う現象である。私は、ボルツェ村での滞在も残り少なくなった11月の下旬に、泊まっていたロッジの主人A氏に従ってヤクを追ひ、ドウドウ・コシ上流部のナー (Na) と

いうカルカまで遡って土中に埋めてあるジャガイモの掘り出しを手伝ったことがあった。その途中にあるカルカで、1人の男が寝込みウンウン唸っている場面に出会ったのだ。そばに付き添っていた彼の妻によれば、彼はナムチュ・バザールから酔って帰ってくる途中の崖道で足を踏み外したそうだ。後日ボルツェ村を引き払ってA氏とナムチュ・バザールへ向かう途中でその男が転落したという地点を示された。A氏によれば、彼の息子も数年前にそこで滑落して腕の骨を折った、とのことである。息子の滑落がそこと同じ地点であったかどうかはともかく、ドウドウ・コシ沿いのルート上には各所に上部からの土砂と川床へ落ちる急峻な崖が待ちかまえており、人びとの安全な通行が脅かされている、といえるだろう。

この地域の住民やここを訪れるトレッカーたちは、高所障害の危険にさらされるだけでなく、国立公園内における燃料の調達問題、通行の危険といった諸問題をすべて切り抜ける必要に迫られることになるのだ。

観光化にともなう自然破壊について、神戸（1992）は獣医としての立場からケニアのマサイ・マラ動物保護区におけるエコ・ツーリズムによる環境破壊の事例を紹介している。彼は、サファリ客が乗り回す多数の自動車によって草原が破壊され、動物にもストレスがたまること、ロッジから出るゴミと汚水によって動物の健康が脅かされていることなどを報告し、近年各地域で行なわれるようになったエコ・ツアーへの自重を呼びかけている。これを今回のクンプでの経験に照らせば、私はこの地域が過度に観光化されることに強い危惧を感じざるを得ない。

4 おわりに

私は本文において、白神山地域での調査結果を念頭におきながらクンプ、ドウドウ・コシ流域での体験を山村地帯における住民生活の変遷、環境問題という側面から予備的に分析しようと試みた。クンプ地域の住民は、地域が国立公園化されて「世界の遺産」に指定されたことにより、地域の自然環境と文化に根ざした生業システムを産業社会のシステムにシフトさせ、深刻な環境問題に直面している。

白神山地域の場合も、外部経済との関係においてクンプ地域と類似した経過をたどりながら世の注目を集めるようになってきた。ここでも外部の圧倒的な資本力による開発に直面したが、森林が大規模に伐採されることに対して住民の危機感が結集したことによって当初の開発計画は一時停止に追い込まれた。しかし、今のところ地域における住民生活に何らかのアメニティを見いだす動きはわずかであり、実質的には過疎化への歯止めはかかっていない。そこに「世界の遺産」として指定される話もちあがってきた。「世界の遺産」に対する一般の認識としては、「きれい」、「美しい」ものを保存するという面ばかりが強調される傾向があるが、その地域の自然と人は博物館の展示品ではない。

白神山とクンプ地域では自然のスケールと質が大きく異なるが、もし白神山地域がクンプと同じような道をたどることになれば、一体「誰のための遺産指定か」が問われることになるだろう。私は今回のドウドウ・コシ流域での滞在中、クンプでは近い将来人間の立ち入りを制限することが検討される日が来るのではないかと常に感じていた。掛谷（1990）は国土保全を「産業化」することによる地域再生の可能性を提起しているが、クンプ地域においても登山・トレッキングに依存する現状を打開し、環境保全を産業化する道が拓けないであろうか。私たちは今後とも「世界の遺産」を食いつぶすのではなく、人間と自然との共存・共生関係をどこまで達成することができるのかを考えていかねばなるまい。

文献

- 1) 朝日新聞 （1992）, 1992年8月21日付け東北特別版記事
- 2) Brower, B. (1991) , Sherpa of Khumbu - People, livestock, and Landscape. Oxford University Press.
- 3) Fisher, J.F. (1990) Sherpas - Reflections on Change in Hima laya Nepal. University of California Press.
- 4) C.von Furer-Haimendorf, (1964) The Sherpas of Nepal - Bhud dist Highlanders. Sterling Publishers, New Delhi.
- 5) — (1975) Himalayan Traders - Life in Highland Nepal ohn Murray, London.
- 6) — (1984) The Sherpas Transformed - Social

- Change in a Buddhist Society of Nepal. Sterling Publishers, New Delhi.
- 7) 古川 彰 (1990)「ヒマラヤ高地住民の環境認識研究ノート」ヒマラヤ学誌 第1号、京都大学ヒマラヤ研究会。
 - 8) — (1991)「サガルマタ国立公園の成立と住民の環境問題—ヒマラヤ高地住民の環境認識研究ノート」ヒマラヤ学誌 第2号、京都大学ヒマラヤ研究会。
 - 9) — (1992)「援助調査プロジェクトと住民の環境認識ノート—ヒマラヤ高地住民の環境認識ノート」ヒマラヤ学誌 第3号、京都大学ヒマラヤ研究会。
 - 10) 今井一郎 (1990)「赤石川と生きた人びと—青森県・鯉ヶ沢町・旧赤石村—」掛谷誠編『白神山地ブナ帯における基層文化の生態史的研究』弘前大学人文学部。
 - 11) Jefferies, M. (1991) Mount Everest National Park - Sagarmath a Mother of the Universe. The Mountaineers, USA.
 - 12) 掛谷 誠 (1990)「生態史と文明史の交錯—白神山地における自然と生活の生態史をめぐる諸問題—」掛谷誠編『白神山地ブナ帯における基層文化の生態史的研究』弘前大学人文学部。
 - 13) 河合明宣 (1990)「ヒマラヤ高地村落研究の方法—第一次予備調査基本データ—」ヒマラヤ学誌 第1号、京都大学ヒマラヤ研究会。
 - 14) — (1991)「ヒマラヤ高所村落における疫学的研究—人文班研究概要—」ヒマラヤ学誌 第2号、京都大学ヒマラヤ研究会。
 - 15) — (1992)「シェルパ村落経済の変容」ヒマラヤ学誌 第3号、京都大学ヒマラヤ研究会。
 - 16) 神戸 俊平 (1992)「マサイ・マラ動物保護区の現状とエコツーリズム」JANESニュースレターNo.1 日本ナイル・エチオピア学会。
 - 17) 月原敏博 (1990)「観光・交易の村における農耕と牧畜—ナムチェ村研究ノートから」ヒマラヤ学誌 第1号、京都大学ヒマラヤ研究会。
 - 18) — (1992)「チベット人の歴史的移動・定着に関する若干の考察—ソルヘクンブとプータンの観察から—」ヒマラヤ学誌 第3号 京都大学ヒマラヤ研究会。